



「桶狭間は晴れ、
のち豪雨でしょう
天気と日本史」

松嶋憲昭 著
メディアファクトリー、
2011年10月、185頁、
740円（本体価格）
ISBN 978-4-8401-4277-9

「歴史に『もしも』はない」とはよく言われる言葉ではあるが、もしもその日の天気が変わっていたらその後の歴史は変わっていたであろうという出来事は過去に多く存在する。その代表的な出来事の一つがタイトルにある桶狭間の戦いであろう。一見奇抜に思えるタイトルであるが、本書は、気象予報士の資格を持つ著者が史料を見直して推察した「その日」の天気を元に、日本史上有名な事件の真実の姿に迫っていく、という新しい切り口で書かれた至って真面目な歴史と気象の解説書である。新書という体裁であるので、普段気象学に馴染みのない読者層にも天気について興味を持ってもらえるよう分かりやすく解説することに主眼が置かれている。本書で取り上げられている出来事をタイトルそのままに列挙すると、

- 第1章「博多湾で神風が吹くでしょう」
- 第2章「桶狭間は晴れ、のち豪雨でしょう」
- 第3章「壇ノ浦では潮の満ち干きにご注意ください」
- 第4章「季節風に乗って島津勢が来そうです」
- 第5章「二・二六は大雪に見舞われるでしょう」
- 第6章「異人さんは台風に泣くでしょう」

と、章のタイトルも天気予報風に工夫されている。そしてその構成も、教科書に載っていて誰もが知っている日本史上の大きな出来事（第1、2、3、5章）からややマニアックな出来事（第4章）まで、時代も様々で広い範囲から題材が選ばれている。

最初の元寇である文永の役について書いた第1章、本書のタイトルにもなっている桶狭間の戦いを取り上

げた第2章、壇ノ浦の戦いの勝敗を分けた潮の流れについて考察した第3章が殊に面白い。日本史の教科書などでは、「2回の元寇は元の艦隊が大風により壊滅的な被害を受け撤退し、日本は大きな被害を免れた」と学ぶが、当時の史料にあたってきちんと調べていくと、2回目の元寇（弘安の役）には具体的な台風の記述が見られるのに対し、最初の元寇である文永の役には戦当日の台風や大風のはっきりした記述がない、ましてや時期は今の暦で11月の末、その時期に台風が来ることは現在の常識ではまず考えられない、果たして真相は…?といったようにそれぞれの事件について、当時の記録などの史料を示し、それらからこれまで歴史学者たちが導いてきた複数の説を列挙した上で、その日の気象状態を気象予報士の目で推察し、それによりどの説が有力かの証拠固めをしていく。その過程は、気象に馴染みのない歴史ファンにも歴史に興味のない気象ファン(?)にも面白く読めるのではないだろうか。

一方、第4章で取り上げられている島津の琉球入りは、あまり知られていない出来事であるので本書で解説されている内容には興味を惹かれたものの、気象学の知識で見直した結果認識を新たにした前3章とは異なった趣で、少々物足りなく感じた。また、第5章はタイトルに二・二六とあるが、本文の内容は二・二六事件そのものよりもその背景にあった昭和初期の冷害についての説明が章の大部分を占めており、タイトルに少々無理があるのではないかと思う。

とはいえ、普段は気象の世界に無縁な読者をこちらの世界に引き込むには、本書は十分な役割を果たしていると思う。また、著者は、本書では気象現象そのものの解説というより気象災害への啓発に重きを置いたとあとがきにある。第6章の台風と高潮について分かりやすく解説した部分はそんな著者の面目躍如とも言えるであろう。

折しも今年のNHK大河ドラマは「平清盛」である。本書の第3章を読んだ上で潮の流れに注目しつつドラマを鑑賞しては如何でしょう。

（東京大学大気海洋研究所 荒井美紀）